

The Japan Academy of Midwifery Newsletter NO. 20 発行所 日本助産学会

東京都千代田区富士見1-8-21

## 日本助産学会ニュースレター

東京都助産婦会館内

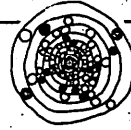
〒102 電話03-3221-1020

FAX 03-3221-0417

代表者 近藤潤子



## 国際助産婦連盟第24回大会



日本助産学会理事 竹内美恵子

国際助産婦連盟第24回大会は、ノルウエーのオスロー市で91カ国、2,700名の助産婦が参加し開催された。1908年に設立された世界で最も古い歴史をもつノルウエーの助産婦協会は、人口400万人、年間出産は約6,000人で、約2,000人の助産婦が有資格者として登録されている。しかし、助産婦活動を行っているのは1/6程度であり、助産婦の仕事がノルウエー全土のすべての女性たちの手の届く状況には至っていない。このような状況の中で、第24回大会をノルウエーに誘致したのは、各地方に必ず一つ、助産婦による出産の場を提供するべく、法を動かし助産婦の教育、研究、啓発活動を促進させるためであったようである。

さて、本大会の「助産のアートとサイエンスはよりよい未来を産む」と題したメインテーマは、ノルウエーの助産婦を中心にデンマーク、スウェーデンの助産婦が加わり、教育部門、臨床部門、研究部門が編成され計画されていた。学術プログラムは、「リプロダクティブヘルス」「助産婦の仕事と文化的側面」「心理学的側面」「生理学的側面」「教育と研究」の分野別に区分され、参加者の期待と関心に応じて最新の知見が交換できるように準備された。

1987年、国際助産婦連盟ハーグ大会においては、母と子の健康を増進するために、そして「母性の安全」という目標を達成するために、助産婦の協会の結束して、よりよい戦略を開発するべきであるとの行動声明を採択した。また、助産婦は「女性とともにいる」役割を選び、必要な教育/訓練を受けて、リプロダクティブヘルスに関連して、家族及び地域社会における健康増進と予防活動に関わっていく責任を引き受けている。したがって、助産婦にとって母性の安全こそが重要な関心

ごとであるとする国際連盟の主張は、本大会においても引き続き学会の重要な基盤となり、WHOとの共同プロジェクトとして推進してきた「safe motherhood」に焦点が当てられていた。

大会は、助産実践と助産教育の資を確実なものにするための400の論文の研究結果が報告された。

基調講演は、劇的な社会変化が生じている時代を背景に、助産婦の使命と知識的基盤、そしてその活動についての将来への提言と助産婦の将来が分析された。助産が科学的探求の一分野として成長を遂げてきたその歴史についても検討が加えられた。助産実践活動に対して合理性を与える知識体系、また自律的な実践を展開するために、これらの知識を思慮深く適用するための助産婦の能力に特殊な専門的教育が必要との検討も加えられている。技術であり、科学である助産ケアは、サービスを提供するためにどのような教育訓練が必要であるのか。将来助産婦が発展していくために、いかなる変革がなされるべきか。

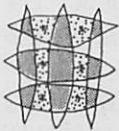
今、地球規模での活躍が期待される助産婦の教育は、国際的に評価される教育を目指すことが重要であると思われる。平成9年度に改訂される助産婦教育カリキュラムは、真に助産学教育内容の充実を図るものであろうか、十分な論議を深める必要性を痛感しつつ、未来的思考と目標に向けて開催された国際学会の報告としたい。

一方、インターネットやコンピュータを活用した、各国の助産婦の活動や教育に関するデータベースの作成や国際的な情報交換システムの構築等、時代に即応した国際教育協力の推進についての検討もさらに継続され進められることとなっていることを付記したい。

日本助産学会主催 ICM ツアーに参加して

日本助産学会主催第24回 ICM大会参加ツアーは、瀬井房子団長のもとに35名の会員がオランダのVroedvrouwenschoolでの助産婦教育を2日間にわたり見学し、意見交換を行った後オスロに向かい、ICM大会に参加してきました。オランダの助産婦学校見学は、近藤理事長が事前にオランダの助産婦会会長と入念な打ち合わせをして下ったお陰で、学校上げての歓迎の元に充実した見学を行うことが出来ました。ICM大会でもノルウェー助産婦の心からの歓迎と、世界の助産婦の将来展望とその熱意に圧倒されながらも、日本の今後に向けて多くの刺激を受けてきました。以下に、若い会員の感性で受けとめたオランダでの助産婦教育の見学と、ICM大会参加の印象を紹介します。

オランダの助産婦学校見学だより



富士吉田市立看護専門学校教員  
安藤 正子  
元帝京山梨看護専門学校教員  
小林 由美

アムステルダムからバスで南へ4時間走る。車窓から見える風景は放牧された羊・牛・馬…。するとヘールレンという田舎町に着き、そこから更に30分行くとケルクラードに到着する。

\*オランダの助産婦の現状と助産婦教育

現在オランダで活動中の助産婦は489名である。オランダ農業国なので、農業出身者が多い。年間9万人の新生児が誕生し、その際妊婦の75%は助産婦の診療を受けていて助産婦との接点が非常に多い。全分娩数の32%が家庭分娩というのも特徴である。

助産婦の信念としては、①責任②正常分娩③予防で、リスクを最小限にすることであり助産婦の地位は社会的に確立されている。

ケルクラードにあるVroedvrouwenschoolの学校長であるOudshoorn氏より学校紹介していただいた。この助産婦学校は、1983年に発足した。学校は在学4年制で1学年40名である。オランダには、助産婦学校が3つあり、300年の歴史がある。学校の運営は全て政府機関で行われるが、カリキュラム等は各学校独自で行っている。

入学の方法としては、オランダ全国の中で助産婦学校への入学希望者の中から抽選で、2000人に絞りその後試験をするという方法である。試験の前に、くじに当選するという強運がまず必要となる。助産婦学校入学は、

高校卒業後に入学できる。

学校の教育者数は、各職種合わせて88名でありそのうち助産婦は25名である。学校のカリキュラムは、PBL(Problem Based & Learning)という方法をとっており、学生達は少人数でグループ編成され、主体的に学び、学習→実践→学習→実践を繰り返しながら1つ1つの課題をクリアしている。助産婦としての技術を獲得するために、準備→集団トレーニング(モデル使用、学生同士など)→個人のレベルに合わせたトレーニング→技術テストの段階を踏んでいく。つまり、技術をできる限り早く獲得し、実践していけるようにすることが最大の目標となる。在学中の学生の分娩介助数は正常40例・異常20例であり、4年間に分娩介助数が100例を越える学生もいるという。助産婦としての技術以外にマネジメントも教授されている。

学校付属の産院(クリニック)は、ホテル並のサービスをモットーとし、帝王切開術等の手術設備や小児への対応もできる。院内は色づかいもきれいであり、ユニフォームは自由なのでTシャツを着ているスタッフもいた。分娩のスタイルは産婦の希望に添うように考えられている。このクリニックにおける分娩件数は1000件/年で、分娩室は4室ありシンプルで普通の病室といった雰囲気である。必要時に必要なものをセッティングするというスタイルである。

分娩時に夫が付き添うのはオランダでは習慣であり、夫と一緒に泊まれるようなシステムも備えられていた。

正常分娩の場合の入院期間はフリー(最大10日間)で、退院後は家の近くの地域看護婦や助産婦がフォローするシステムである。

## \* 技術演習の実演

助産婦学校の学生達による技術演習の風景を見学させていただいた。

技術としては、①レオポルド触診法②新生児の観察③問診④分娩介助⑤パパニコロウ検査で、学生の誘導によってグループ毎に見学を行った。

私達が驚いたのは、分娩時にほとんど会陰保護をしないこと、すなわち児が自然に出てくるのを待ち、児の頭を持って飛び出さないように調整するということである。会陰切開も縫合も学校で学習している。問診については、とても丁寧に相手のことを聴き、情報収集をしていた。内容としては、ほとんど日本の問診と変わらなかったが、ドラッグやアルコールについては詳しく行っていた。問診をしながら日常生活の指導も同時に行っていた。

学生達は、とてもおびおびとそして確実にどの技術も行っていた。こちらの質問に対しても精一杯答えてくれるし、日本のことについても質問してくるなどとても積極的であった。この日、演習の披露や私達の誘導してくれた約20名の学生は、自分達からボランティアとして協力してくれた(全員2年生)。それらの学生の中に男子学生が1人いた。オランダの男性助産士は全体の2.4%で40名である。その男子学生が助産士をめざす理由は「I like medicine, people, communication」とはっきり答える姿勢から助産婦という職業に対する責任、目標が感じられとても好感がもてた。

## \* 講演・意見交換

Vroedvrouwenschoolの教員・生徒・医師等が出席して行われた。G.Keyzer-Land-kroon氏による自宅分娩介助のビデオ、日本の母子保健のビデオ、A. Ros氏による骨盤位分娩に関する講演が行われた。それぞれの現状の中での活動の様子がわかりとても参考になった。

## \* 交流会

講演の出席者の方々とテーブルを囲み、なごやかな交流会が行われた。どのテーブルも時間がたつごとに会話がはずみ、お互いの国の諸々について語り合った。

……今回の見学を通して感じたことは、日本の助産婦教育と共通することとして、生命

に対する責任や正常分娩をめざすこと、対象の考えや思いを尊重することである。オランダの教育の現状は、オランダにおける助産婦の現状に合っているものであるから、その中から日本の助産婦教育にいかしていける所は、積極的に参考にしていきたいと思った。

(1996. 5. 23~24)

## 「生命の樹」の下で思うこと



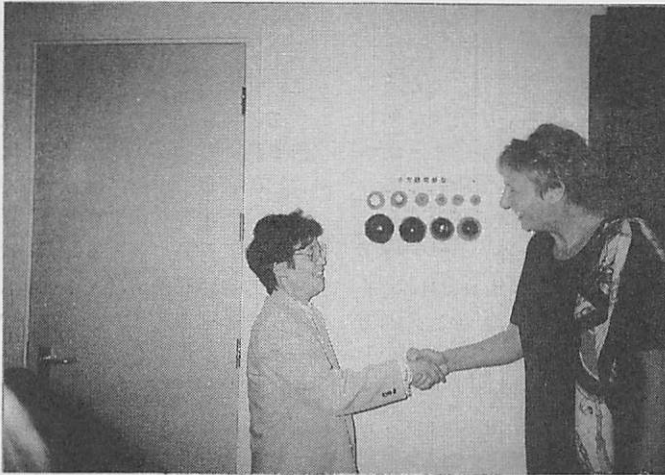
岩手医大附風病院 産婦人科病棟  
小 館 千 公

新緑の5月下旬、ノルウェー・オスロ市は、私の住んでいる岩手県盛岡市を思いださせるほど春の草花が一斉に咲き誇り、森の淡いもえぎ色と美しいコントラストを見せていた。日中は、半そででいられても朝晩は冷え込み、北緯60度の春は、なかなか手厳しい。

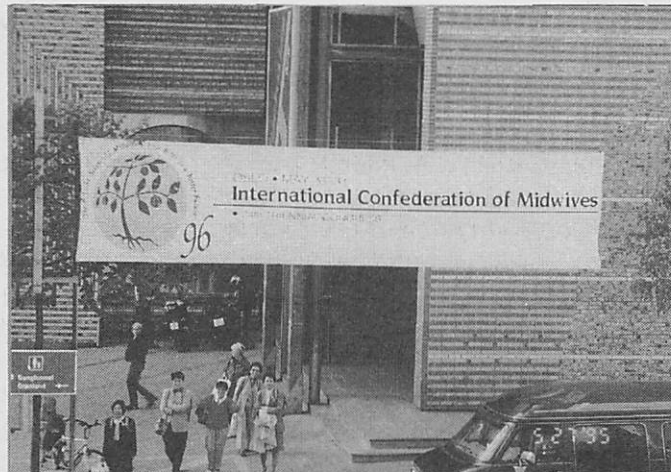
さて、私のオスロ滞在は、慣れない英語と日本語同時通訳とで、耳がいつも音声多重テレビのようで、いささか疲労がみであった。しかし、世界中の助産婦が一同に集まって手を結び、言葉や人種、政治の問題を越えた大きな力を感じた大会であった。思い起こすに、私がICMを知ったのは、第22回の神戸大会である。あの大会の参加をきっかけにして、ICMが身近なものに感じられ、世界各国の助産婦たちの熱意に圧倒されたものだった。そして、今回もそのパワーには圧倒されっぱなしであった。朝9時から1時間の基調講演のあと、5つのテーマにわかれて、各会場で講演があり、昼休みのあとは午後5時まで分科会。前もって自分の選択した講演を聞き、日本語通訳がない場合は、とにかくスライドを写し全体像の把握に明け暮れる毎日だった。講演会場も大きく3会場にわかれ、ひとつの講演が終わると、赤いICMオリジナルリックスバックを背負った団体がぞろぞろと、まるで金、銀、黒、茶色のアリの行進のようで愉快だった。そのオリジナルリックスバックは、色、デザイン、機能性ともに参加者の好評を得たようで、だれもが一樣に背負ってはいるが、中でも特に体格の良い欧米の助産婦たちの場合は、いとも軽々と、さっそうとしていて、とても良く似合っていた。いつも、きちんと背筋を伸ばし、自分の仕事に誇りをもっ



学生の演習風景



瀬井団長よりプレゼンテーション



て向かっている彼女たちを反映しているようでとてもまぶしく思えた。

4日目の基調講演、ドロシー・マナテ氏は、『教育と研究を通じての女性のニーズに応える』と題して、助産婦のする研究と教育の重要性や発展途上国の助産婦たちが抱えている問題を訴えた。「今こそ、発展途上国の要望を聞くべきだ。」と述べた時、会場から歓声がわきあがった。これほど多くの助産婦たちがこの考えに賛同し、いま時を同じくして世界中の助産婦がひとつになったような感じがした。今回のICMのロゴマークは「生命の樹」である。スカンジナビアの神話では、生命の樹はその枝と根が世界全体を支えているとされ、生命が時代を越えて存続し続けることを象徴している。そして、その枝は、小さくても重要な働きがある。大きな枝は、小さな枝にも太陽の光が届くように、成長する機会を与えなくてはならない。さて、日本はどうだろうか。いままで私は、これほど日本を意識し、身近な問題として考えたことはなかった。しかし、自分の病棟にもアジアからの花嫁が数多く入院する時代になった。言葉も生活習慣も違う彼女たちに今してあげられることは何か。私の場合、まずは身近なところから「生命の樹」を育てていきたいと思う。

このようなステキな経験を与えてくださった世界の助産婦たち、ありがとう。

#### 素敵な人々との出会いのなかで



岩手医大附属病院

白岩 秀子

5月26日15時、カールヨハン通りに面したオスロ大聖堂にて、宗教的儀式が行われた。私はあこがれの教会で、多国の民族衣装を纏った助産婦の熱気と、パイプオルガンの旋律に陶醉していた。その時、隣に座った日本人女性が、「開業助産婦になりませんか、楽しいですよ」とニコニコと話し掛けてくれました。ひろ助産婦の井上さんと、母乳育児相談の行天さんでした。その表情の豊かさの中に、プロ意識と余裕、本当に楽しんで助産婦を全うされていることが分かりました。

開会式は、場所をオスロスペクトラムに移

して行われました。代表者の挨拶の中で、Unni Kirsterさんは、「女性をおきざりにすれば、国を置き去りにする」と述べていました。また、ミュージカル「生命の樹を捜し求めて」では、大会のロゴマークともなった助産婦の象徴である生命の樹が、人類が希望をもって永遠の存在にむかって正しい方向を歩むよう導いてくれる存在として表現されているように感じました。人類が繰り返している社会、政治的な問題をとらえ、助産婦の自己の精神性と科学性を統合し、創造性ある活動が、今必要であり求められていることを感じました。

5月27日、私はテーマ「文化的差異」の講演に参加するためSASプラザの一室にいたのですが、たぶん私がそこで唯一の日本人だったようです。突然、金髪の女性が、「日本人ですか……。私、日本で産婆さんに取り上げてもらったのヨ」と流暢な日本語で親しげに話し掛けてくれました。私は、ホットな気持ちですごすことができましたが、後でその女性がDorothea, M. Langさんであることを知りました。その後も、助産学会の先生方とともにLangさんとアメリカの助産婦教育や社会的地位向上のための活動について何う事ができ、彼女のそのパワフルな行動力、知的さ、親和性は、アメリカの助産婦を表現しているように感じました。

今回私は、助産学会のツアーで初めてICMに参加することができました。最初は、錚錚たるメンバーの先生方に圧倒しプレッシャーを感じていました。しかし多くの人々との出会いやふれあいを通して自分自身を素直に認めることができ、すべて必然であり必要であったとわかりました。多様性のある助産婦の役割の中で自分がやりたいこと、出来ること見極め楽しく希望をもって、母子に関わっていきたいと思います。ICMに参加でき、ステキな人々に出会えたことに感謝しています。



## 助産学会からの ICM スポンサー・ア・ミッドウイフの紹介

会員の皆様にご協力戴きましたスポンサー・ア・ミッドウイフ基金は、総計 574,269円になりました。大勢の皆様のご厚意に心より御礼申し上げます。

早速、規定額の 3,500ポンドを ICM 本部に送金し、南アフリカの Mrs. Sengane さんがスポンサーの対象になり ICM 大会に出席されました。尚、Mrs. Sengane さんは黒人の大学である MEDUNSA 大学の助産学の講師です。後日詳細な報告を致します。

## 投稿のお勧め

編集委員会

日本助産学会誌第10巻第1号を12月初旬に発行します。締切日を平成8年7月末日として投稿を受け付けていますので、奮ってご投稿ください。お待ちしております。

## 1. 投稿者の資格

投稿者は本学会員（特別会員も含む）に限ります。

## 2. 原稿の種類

原稿の種類は、論壇、総論、論著、原著、資料、その他ですが、論文の内容は他の出版物（国の内外を問わず）に発表あるいは投稿されていないものに限ります。

## 3. 投稿の手続き

原稿は3部（うち2部は複写でもよい）を、封筒の表に「日本助産学会誌原稿」と朱書きして、書留便で、日本助産学会事務所宛に郵送してください。

日本助産学会事務所

〒102 東京都千代田区富士見1丁目8番21号 日本助産学会

電話 03-3221-1020

FAX 03-3221-0417

## 4. その他

詳細については、投稿規程（第9巻第1号に記載）を参照してください。





## 日本助産学会 10周年記念行事



日本助産学会10周年記念行事は、3月16日(日) 13:30~17:00 に名古屋市公会堂大ホールにおいて、下記のプログラムにそって盛大に開催された。

1. 講演 「日本助産学会10年間の歩み」 宮里 和子 理事

2. 記念論文の発表と表彰

青木康子理事より、10周年記念論文には4編の応募があり、理事長を交えて審査の結果、聖路加看護大学毛利多恵子氏の「パニック状態になった産婦の出産体験—その体験に含まれる要素と要因—」の論文が記念論文として採用された経過の報告後、毛利多恵子氏に表彰状と賞金が近藤理事長より授与された。

3. ロゴマークの発表と表彰

竹内美恵子理事より、ロゴマークの応募は5名より9点有り、専門家の意見を交えた検討経過が報告され、更に理事会においても審査した結果、桑原由紀氏の「輪」をテーマにし妊産婦の手、助産婦の手、家族の手が結び合う愛と技術と知識の「輪」のマークが採用された。当日、桑原由紀氏は都合で出席できず、代理の横山桂子氏に表彰状と賞金が近藤理事長より授与された。



4. 記念講演

「助産学の発展過程と課題」 演者 近藤潤子理事長  
座長 浅生慶子監事

5. 招聘講演

「助産婦活動の新しい試み」 演者 英国テームズバレー大学教授 レズリー・A. ペイジ  
座長 近藤潤子理事長

レズリー・A. ペイジ教授の講演は、妊産婦サービスに関わる人々とその指導者に対して、組織の変革を目指す指針を示され、新しい助産方式を見いだす考え方が述べられた。この講演の全容は、レズリー・A. ペイジ編、「生まれかわる助産婦達」として、1996年3月に青野敏博氏の監訳で、医学書院より出版された。



## ◆◆◆◆◆ 第10回日本助産学会総会報告 ◆◆◆◆◆

第10回日本助産学会総会並びに学術集会は、1996年3月17日(日)名古屋市公会堂大ホールにおいて、600余名の参加者により盛会に開催された。総会は13時00分より当日参加会員中の118名の出席のもとに、近藤理事長の挨拶により開会された。

総会における報告・審議事項の要旨を報告します。

## 1. 平成7年度会員数について(3月16日の状況)

普通会員：1,046名 特別会員：18名  
機関会員：19機関

## 2. 平成7年度収支決算

収入 9,199,227円(繰越金、会費、雑収入ほか)  
支出 7,825,940円(会議費、事業費、事務費ほか)  
繰越金 1,373,287円

## 平成7年度特別会計報告

## 1) 学術集会基金

収入 2,698,967円 支出 1,150,000円 現在高 1,548,967円

## 2) 別途積立金

寄付 1,500,000円

## 3) ICM評議員出席費用積立金

積立金(平成3年~7年度) 1,500,000円  
第23回出席 300,000円 現在高 1,200,000円

## 3. 理事会報告

理事会は5回開催し、10周年記念行事及び学会の運営、事業の推進についての審議と、入会申し込み者の審査を行った。

## 4. 次期評議委員会は、出席30名、委任状7通にて開催し、次期理事、監事候補者を選出した。終了後理事候補者の互選により、理事長、副理事長候補者を選出した。

## 5. 庶務報告

- 第24回ICM大会のパンフレットの送付及び助産学会主催のツアーの受付を行った。
- 阪神淡路大震災の救援募金の受付をし、227,000円を立山評議員に送付し付託した。
- 事務局の体制は全国助産婦教育協議会との共用をやめ、週2回の専任配置とした。
- スポンサー・ア・ミッドワイフの募金を会員にニュースレターを通して行うと共に、学会会場にても行い、1名の基金を確保した。
- 厚生省健康政策局看護課長宛てに「看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会助産婦課程検討に関する要望書」を全国助産婦教育協議会、日本助産婦会の連名で提出した。

## 6. 活動報告

渉外委員会：第6回国際助産婦の日の事業について、関連機関と折衝した。

会則委員会：日本助産学会評議員選出に関する規定、理事・監事の選出及び欠員を生じたときの取扱い、特別会計規定、学術奨励基金運用に関する事項について検討をした。



日本助産学術会議担当：日本学術会議便りの日本助産学会誌への掲載、第1回日本助産学会学術講演会の開催、学術研究団体調査表の提出、学会番号の設定(10629)、平成8年度学術集会等予定調査表の提出、平成8年度科学研究補助金「研究成果公開促進費」への応募、第17期日本学術会議への団体登録に関する会議への出席、看護学研究連絡委員会設置に向けての情報交換と要望書の提出を行った。

広報委員会：国際助産婦の日のポスターを日本看護協会、日本助産婦会、日本助産学会で検討して作成し、関連機関に発送した。

国際助産婦の記念行事開催地へポスター、リーフレットを送付した。

ニュースレター、第17号、第18号、第19号を発行し送付した。

国際委員会：ICMからの関連事項の処理や、情報を会員に提供した。ニュースレターへICMの記事の提供、第24回ICMツアーの企画、調整を行った。

編集委員会：学会誌第9巻1号の編集発行した。学会創立10周年記念論文を募集、選考を行い、授賞作品1編を選考した。

学術振興委員会：平成7年12月10日に京都大学会館で第8回日本助産学会ワークショップを開催した。更に文献探索支援を21件行った。

業務・教育検討委員会：「助産学会設立10周年の歩み」を第10回学術集會集録に掲載した。「将来の助産婦のあり方検討委員会」と本委員会との業務分担を行った。さらに学会としての見解を明確にするための、「日本助産学会スタンダード」作成の継続検討中である。

将来の助産婦のあり方検討委員会：高橋浩美氏による学術講演会の開催、助産婦の今後10年間のタスクホースの作成、助産婦教育の改革、助産婦の自立を求める活動への支援、米国エール大学修士課程CNM教育に関する情報収集を行った。

以上の他、第10回助産学会学術集會準備状況が報告され、3月17日の参加登録者622名と報告された。

## 7. 審議事項

### 1) 平成8年度事業計画

- (1) 第11回学術集會開催
- (2) 学会誌・ニュースレターの発行
- (3) 助産学に関する研究の振興
- (4) 助産婦の業務・教育についての検討
- (5) 将来の助産婦のあり方検討
- (6) 国際助産婦の日に関する事業の実施
- (7) 国際助産婦連盟及び関連団体との交流
- (8) 日本学術会議登録等関連事業
- (9) 運営に関する会議開催(総会1回、評議員会1回、理事会5回)

### 2) 提案事項

特別会計規定設置に当たり会則の改正をしたい。

第22条(二)本学会に一般会計と特別会計を置くとし、従来の(二)を(三)とする。

日本助産学会特別会計規程(要項15頁参照)

上記について、一括審議して採決し、提案通り決議された。

### 3) 平成8年度収支予算案

収入	8,673,287円	(繰越金、会費ほか)
支出	8,066,466円	(会議費、事業費、事務費、予備費ほか)
繰越金	606,821円	



別途会計…使用規程を作成し学会の充実、発展を図りたい。  
 以上は、1項目毎に審議され、拍手により承認された。

会場において、スポンサー・ア・ミッドワイフの募金を行い、176,645円の基金があった。

#### <次々期学術集會会長紹介>

第12回学術集會会長として、評議員会で選出された平澤美恵子日本赤十字看護大学教授を、近藤理事長から紹介された。

次期学術集會会長に決定している、竹内美恵子徳島大学医療技術短期大学部教授より1997年3月23日(日)に、第11回学術集會を徳島市文化会館において開催することを紹介された。

### ●●●● 第10回日本助産学会評議委員会開催報告 ●●●●

1996年3月16日(土)名古屋市公会堂4階ホール控え室において、出席30名、委任状7通により開催された。理事長より3年間の評議員としてのこれからの尽力を依頼し、明日の総会承認を得ることが示された。続いて、理事・監事の選出について検討され、推薦と投票の意見があり、投票によることに決定された。選挙管理者を議場から推薦し、3名(加藤尚美、菅沼ひろ子、園生陽子)に委嘱され、理事の選挙が行われた。

選挙の結果、青木康子、小木曾みよ子、加藤尚美、近藤潤子、竹内美恵子、平澤美恵子、藤田八千代、松本八重子、宮里和子、三井政子の各氏が選出されたが、加藤尚美氏が辞退し承認され、次点の多賀琳子氏が繰り上げ選出された。

監事は、2名連記により投票し、浅生慶子、加藤尚美氏が選出された。

新評議員には、評議員の責務と入会申込上の手続きについて説明された。他に総会提出事項と収支予算案の審議、および第12回学術集會会長の選出が行われた。

(庶務担当理事 小木曾、文責 平澤)

### 第2回日本助産学会学術講演会のお知らせ

第2回日本助産学会学術講演会を下記のように企画しております。お誘い合わせのうえぜひご参加ください。

期 日：平成8年9月28日(土) 13:00~16:00

内 容：テーマ 「新時代の子産み子育て」

1) 学術講演：赤ちゃんを産むということ

2) シンポジウム：新時代の子産み子育て

会 場：北里大学医学部合同講義室

参 加 費：医療職 3000円 一般・学生 2000円

会場の都合により先着350名の受付となります。講師・シンポジストは現在交渉中です。

くわしい内容等につきましては、決定次第申し込み用紙を添えて後日ご案内いたします。

連 絡 先 第2回日本助産学会学術講演会事務局(宮里和子・島袋香子)

〒228 神奈川県相模原市北里2-1-1 北里大学看護学部

TEL 0427-78-9383

助産婦の達成課題に関するアンケート依頼

助産婦の将来のあり方検討委員会

助産婦の将来のあり方検討委員会では、1994年10月から1年半の活動の中で、助産婦の将来像を検討してまいりました。その結果として、表1に示した今後10年間の達成課題を作成し、第10回日本助産学会学術集会ワークショップで会員に提示いたしました。

今後、委員会では課題達成に向けて具体的な方法を検討する予定です。そのために、会員の皆様に 1)表に示した達成課題に関するご意見(このままご承認いただけるか、または達成期限を含めて追加修正したほうがよい項目など具体的に)、2)学会として取り組むべき内容とし優先順位が高い3項目はどれか、の2点についてご意見をいただきたいと考えております。

お忙しいところ誠に恐縮ですが、同封のがきで8月15日(当日消印有効)までにご回答くださいますようお願いいたします。会員の皆様の御意見を参考にして、具体的に活動を推進していく予定です。

表 1. 今後10年間の助産婦の達成課題

目標	10年後に、生き生きとプロとして生きる助産婦を増やす。		
領域	実 践	教 育	研 究
10年目に完成	目標：ハースケナーの定着・発展 1. 助産婦/医師の境界領域についての医学界への提示 2. レベル認定助産婦の活用	1. 助産婦教育水準の保持・明確化のためのモニタリング 2. 政策決定に影響を及ぼす人材の育成	1. 助産学研究者・理論化の育成 2. 研究システム作り(データベース・ツール開発) 3. 研究の蓄積(竹の科学的根拠、竹効果)
7年		3. レベル認定助産婦の育成	4. 国際的視野を持つ研究の推進
5年		4. レベル認定制度の作成 5. 認定レベル教育カリキュラム作成	
3年以内完成	目標：ハースケナー開設 3. 実践家としての達成能力の明文化 4. 助産婦の本来持つべき実践能力、責任範囲についての勧告 5. リスクの開発 6. ケアの質の評価基準の作成とモニタリング(倫理要項含む) 7. 新しいカリキュラムの開発 8. 実用的な助産診断の作成	6. 母性看護学と助産学の境界の明確化 7. 母性看護学教育者の育成 8. 助産婦教育、卒後教育、継続教育のゴール設定 9. 新人教育プログラムの作成 10. 助産婦教育カリキュラム評価の標準化 11. グリッドエントリ教育導入の検討 12. 国家試験問題のレベル審査の機構作成	5. 研究倫理要項の作成とモニタリング 6. 助産診断の概念・定義の明確化 7. 助産診断作成のための実証研究の推進
毎年推進	9. 社会に助産婦ケアのアピール促進 10. 助産婦の活用システム作り(潜在助産婦の活用) 11. ケアニーズ偏在の是正(必要な領域の明確化) 12. ケア効果を目に見える形に提示 13. ネットワークの促進(消費者間、他職種間、助産婦間:施設内、地域)	13. 継続教育の拠点作り(人材育成、資金調達、場所、同窓会組織の強化) 14. 地域における生涯学習の支援(公開講座など) 15. 効果的な教育実践方法の蓄積	8. 実践家と研究者の共同研究の推進 9. 政策に結びつく行政研究の推進



## Japan Academy of Midwifery

## 第11回日本助産学会学術集会

〒770 徳島市蔵本町3丁目 18-15  
 徳島大学医療技術短期大学部専攻科内  
 第11回日本助産学会学術集会事務局  
 (0886) 33-7405 FAX (0886) 31-9612  
 E-Mail:takeuchi@medsci.tokushima-u.ac.jp

## 第11回日本助産学会学術集会 演題募集案内 (第1報)

第11回日本助産学会学術集会は、ICM副会長であり、助産学研究者として国際的にも活躍中のペンシルヴァニア大学J.E.Thompson教授をお迎えして下記の通り開催いたします。

また、ワークショップには助産実践・研究支援のためのコンピューターの活用等を組み入れた企画を準備いたしております。

皆様の日頃の研究成果を期待しつつ、多数の方々のご応募とご参加をお待ちしております。

学術集会会長 竹内美恵子

1. 期 日 1997年3月22日(土)～23日(日)
2. 会 場 徳島県郷土文化会館(徳島市藍場町2-14)
3. プログラム ☆一般演題：口演、示説(ポスター・ビデオセッション)  
 ☆特別講演 ☆会長講演 ☆シンポジウム ☆ワークショップ
4. 演題募集要項

1) 申込み資格：共同研究者も含めてすべて会員に限られております。

2) 発表形式：口演・・・発表時間10分。スライドが使用できます。

示説・・・**ポスターセッション**は、示説面積縦150cm×横90cm掲示板を用いて発表します。

**ビデオセッション**は、VHSビデオテープ(15～20分)を用いて発表します。

発表者を囲んで、直接自由討論ができます。

☆ワークショップは、助産実践・研究へのコンピューターの活用、助産診断・助産技術の演題を募集しています。

3) 申込み方法：下記の事項を官製はがきに記入し、1996年8月31日(土)＜消印有効＞までに送付して下さい。

1. 演題名
2. 研究者名(共同研究者も含む)
3. 日本助産学会会員番号(共同研究者も含む)
4. 連絡先・・・氏名・郵便番号・住所・電話番号

4) 原稿の提出：集録は写真印刷とし、出来上がりはB5版です。

原稿はA4版、43×40行、2段組、片側20字とし、中心3字の空きをおきます。図表を含めて4枚以内でお願い致します。

**\*演題申込みの方には、改めて執筆要領を送付します。**

原稿締め切りは、1996年10月21日(月)＜必着＞です。

5) 申込先：〒770 徳島市蔵本町3丁目18-15 徳島大学医療技術短期大学部専攻科内  
 第11回日本助産学会学術集会事務局

電話 (0886) 33-7405/FAX (0886) 31-9612/E-Mail:takeuchi@medsci.tokushima-u.ac.jp

## 第6回「国際助産婦の日」記念行事の紹介

国際助産婦の日の活動は全国的に軌道に乗りつつあり、経年的に行われている地域以外にも、今年新たに記念行事を開催した団体や地域が増えてきました。本学会では、本年もポスターとリーフレットを作成して関連各所に差し上げました。

記念行事を幅広く行う1つのモデルとして、徳島県で「女性と家族のための出産・育児支援」をメインテーマにして、2ヶ月間にわたり県内各施設において行われた実施要綱を紹介いたします。多くの助産婦と女性・家族が参画できる記念行事の持ち方としてご参照下さい。

尚、ICM本部では、国際助産婦の日を開催しての収益金は、是非ICM本部に献金下さいとのことです。ICM本部から指定基金としてユニセフ等に配布致しますとのことです。来年度からご協力下さい。

### 平成8年度「国際助産婦の日記念事業」実施要綱

#### 1. 目的

国際助産婦連盟は、国際助産婦の日を制定し、「西暦2000年までにすべての人々に安全な出産を」のスローガンのもとで、世界各国の助産婦たちが母と子の健康、家族の幸せのために積極的に活動することを要請しております。

本県における本行事の実施目的は、更なる助産婦活動の充実と併せて県民の方々への福祉の増進に貢献することを目的としております。

申すまでもなく、徳島県内で活動するすべての助産婦は、妊娠・出産・産褥・新生児期にある女性とその家族や女性の一生を通じての健康生活を、身近な場で、同じ女性として共鳴しあい責任をもって援助できるよう努力をさせて頂いております。

本年度は、第6回の国際助産婦の日を迎えるに当たり、改めて、助産婦が女性やその家族の方々によりよいケアを提供させて頂くことを目指して、先ず、助産婦自らが社会的責務を確認し、併せて、女性とその家族の期待する様々な妊娠・出産、育児のあり方を支持し、支援させて頂くことと致します。

#### 2. 主催

国際助産婦連盟 (International Confederation of Midwifery)、日本助産婦会徳島県支部、日本助産学会、徳島県看護協会

#### 3. 後援

徳島県、徳島市、徳島母性衛生学会、日本母性保護医協会徳島県支部、徳島県小児保健学会、徳島県国公立幼稚園園長会、徳島県私立幼稚園協会、徳島市保母会、徳島県私立保育園連盟、徳島県女性協議会、徳島新聞社、朝日新聞徳島支局、毎日新聞社徳島支局、読売新聞社徳島支局、NHK徳島放送局、四国放送株式会社、株式会社大塚製薬工場徳島支店、明治乳業株式会社徳島出張所、森永乳業株式会社徳島営業所、雪印乳業株式会社徳島営業所、日本ワイス株式会社、四国花王販売株式会社徳島支店、持田製薬株式会社、アメジスト本館大衛株式会社

#### 4. 実施内容

##### 1) 女性と家族のための出産・育児支援

対象：徳島県内の妊娠、出産、育児期にある女性とその家族

日時：平成8年5月1日(水)～6月30日(日)

開催場所・日時 下記の通り各施設の助産婦が皆様の応援します。詳細は別紙をご覧ください。

県立中央病院 と き：5月1日～5月31日 ところ：産婦人科病棟

内容：1. 母乳相談 2. 両親への沐浴指導

徳島通信病院 と き：5月中旬頃から ところ：病院内ロビー(産婦人科外来前)

内容：1. 展示(体験談、赤ちゃんの写真など) 2. 乳房外来 3. マタニティヨ  
ーガ

- 徳島健生病院** と き:6月1日(土) ところ:郷土文化会館  
 内容:講演「アレルギー予防のための離乳食指導」  
 \*当日は当院(産婦人科)年間行事の一貫としての「お誕生日おめでとう会」を同時開催予定
- 徳島大学医学部附属病院** と き:6月29日(土) 10:00-12:00 ところ:徳島大学キャンパス内蔵本会館  
 内容:マタニティフォーラム「自分らしいお産を」 1. 分娩準備教育 2. 経験談とアドバイス 3. 呼吸法実習 4. 座談会
- 徳島市民病院** と き:6月20日(木) 10:00-12:00、13:00-15:00 ところ:市民病院別館  
 内容:両親学級
- 健康保険鳴門病院** と き:5月11日(土) 13:00-16:00 ところ:健康保険鳴門病院  
 内容:1. 母子相談 2. 栄養相談 3. 骨強度測定 4. 介護教室
- 県立三好病院** と き:5月12日(日) 10:00-16:00 ところ:四電プラザ  
 内容:1. 妊産婦保健指導 2. 沐浴実習 3. 育児指導(離乳食) 4. 乳房の手当 5. 更年期指導 6. ビデオ
- 麻植協同病院** と き:5月12日(日) 13:00-15:00 ところ:麻植協同病院内白菊寮1階ホール  
 内容:1. 助産婦により妊娠中・産後の悩み事及び育児相談 2. 乳房のケア及び相談 3. 妊娠期の栄養指導 4. 展示 5. 及び座談会 6. ビデオコーナー
- 町立半田病院** と き:5月19日(日) 10:00-16:00 ところ:ゆうゆう館  
 内容:1. マタニティヨーガ 2. 新米パパさんへの育児・沐浴指導 3. ビデオコーナー 4. 育児相談
- 阿南共栄病院** と き:6月9日(日) 13:00-16:00 ところ:羽ノ浦町福祉センター  
 内容:1. 「母乳」に関する講演 上田隆医師 2. エレキギターによるミニコンサート 3. ふれあいトーク
- 小松島赤十字病院** と き:6月13日(木) 13:00-16:00 ところ:産婦人科外来指導室  
 内容:産後一ヶ月の母児を対象に母乳相談、育児相談及び生活指導
- 県立海部病院** と き:6月30日(日) 13:30-15:30 ところ:牟岐町立海の総合文化センター  
 内容:両親学級

## 2) 研修会

テーマ:助産婦業務と社会的責任  
 講師 日本助産婦会書記長 岡本喜代子先生  
 対象:徳島県内助産婦  
 日時:平成8年6月23日(日) 10時から15時  
 場所:徳島大学医学部青藍会館

◆ ユニセフ募金(期間中、各施設で受け付けます)

事務局だより



1996. 4～1999. 3月迄の新たな評議員が選出され、新役員のもとに事業が開始されました。厚生省では新カリキュラムを示し、時代の要請で在宅ケアのできる人材の育成に着手しようとしています。高齢化社会において地域活動のできる人材の育成は当然ですが、次世代を担う母子保健対策が後手後手になって

おります。21世紀を担う助産婦の教育、助産婦活動について、1人1人の助産婦が真剣に考え行動を起こす時期が来ております。このような中で、助産学会の果たす役割について皆様からの忌憚のないご意見をお待ちしております。


 日本助産学会評議員名簿
 

1996. 4~1999. 3

北海道	須藤 桃代	北海道立衛生学院 011-611-0291(2601) 札幌市中央区南2条西15丁目 7060
	丸山 知子	札幌医科大学保健医療学部 011-611-2111 札幌市中央区南1条西17丁目 7060
東北	加藤百合子	秋田県立衛生看護学院 0188-32-6169 秋田市千秋久保田町 6-10 7010
	佐々木和子	国立仙台病院附属看護助産学校 022-293-1111(8201) 仙台市宮城野区宮城野 2-8-8 7983
	西野加代子	弘前大学医療技術短期大学部 0172-33-5111(5596) 弘前市本町 66-1 7036
関東 ・ 甲信越	青木 康子	川崎市立看護短期大学 044-587-3521 川崎市幸区小倉 1541-1 7211
	佐々木敦子	信州大学医療技術短期大学部 0263-35-4600 松本市旭 3-1-1 7390
	菅沼ひろ子	水戸市五軒町 2-2-23.302 7310 029-233-1730
	藤田八千代	昭和大学医療短期大学開設準備室 03-3784-8080 東京都品川区旗の台 1-5-8 7142
	宮里 和子	北里大学看護学部 0427-78-9383 相模原市北里2-1-1 7228
	村山 郁子	(社) 日本助産婦会新潟県支部 025-267-9772 新潟市川岸町 2-11 新潟県看護研修センター内 7951
東京	加藤 尚美	杏林大学保健学部 0426-91-0011(4534) 八王子市宮下町 476 7192
	近藤 潤子	札幌医科大学保健医療学部 011-611-2111(2801) 札幌市中央区南1条西17丁目 7060
	園生 陽子	聖母女子短期大学 03-3950-0171 東京都新宿区下落合 4-16-11 7161
	平澤美恵子	日本赤十字看護大学 03-3409-0186 東京都渋谷区広尾 4-1-3 7150
	松岡 恵	東京医科歯科大学医学部保健衛生学科 03-5803-5346 東京都文京区湯島 1-5-45 7113
京	松本八重子	茨城県立医療大学(非常勤講師) 東京都新宿区市谷甲良町 1-27.3A 7162 03-3269-0967
	村上 睦子	日本赤十字社医療センター 03-3400-1311(2226~2264) 東京都渋谷区広尾 4-1-22 7150

- |                       |        |   |
|-----------------------|--------|---|
| 東<br>海<br>・<br>北<br>陸 | 小木曾みよ子 | 小木曾助産学研究所 0568-32-3095<br>春日井市妙慶町 2-20 〒486                   |
|                       | 坂井 明美  | 金沢大学医療技術短期大学部 0762-22-2211(7290)<br>金沢市小立野 5-11-80 〒920       |
|                       | 田邊美智子  | 福井医科大学環境保健学講座 0776-61-3111<br>福井県吉田郡松岡町下合月 23-3 〒910-11       |
|                       | 藤本 栄子  | 聖隷クリストファー看護大学 053-439-1400<br>浜松市三方原町 3453 〒433               |
|                       | 三井 政子  | 名古屋市立大学看護短期大学部 052-853-8067<br>名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄 1 〒467           |
| 近<br>畿                | 岡本喜代子  | (社)日本助産婦会 03-3262-9910<br>東京都千代田区富士見 1-8-21 〒102              |
|                       | 我部山キヨ子 | 京都大学医療技術短期大学部 075-751-3919<br>京都市左京区聖護院川原町 53 〒606            |
|                       | 多賀 琳子  | 母子保健研修センター助産婦学校 03-3262-9910<br>東京都千代田区富士見 1-8-21 〒102        |
|                       | 立山サナミ  | 兵庫県立総合衛生学院 078-733-6611<br>神戸市長田区海運町 7-4-13 〒653              |
|                       | 正木嘉代子  | 正木助産院 06-692-0015<br>大阪市住吉区山之内 1-14-15 〒558                   |
|                       | 宮中 文子  | 京都府立医科大学医療技術短期大学部 075-212-5440<br>京都市上京区清和院口寺町東入中御盤町 410 〒602 |
|                       | 山下 浩子  | 国立舞鶴病院 0773-62-2680<br>京都府舞鶴市字行永 2410 〒625                    |
| 中<br>国<br>・<br>四<br>国 | 岸田 佐智  | 高知女子大学家政学部 0888-73-2156<br>高知市永国寺町 5-15 〒780                  |
|                       | 竹内美恵子  | 徳島大学医療技術短期大学部 0886-33-7405<br>徳島市蔵本町 3-18-15 〒770             |
|                       | 吐山ムツコ  | 吉備国際大学保健科学部 0866-22-9454<br>岡山県高梁市伊賀町 8 〒716                  |
| 九<br>州<br>・<br>沖<br>縄 | 浅生 慶子  | 九州大学医療技術短期大学部 092-641-1151<br>福岡市東区馬出 3-1-1 〒812-82           |
|                       | 賀久 はつ  | むなかた助産院 0940-36-1131<br>福岡県宗像市日の里 1-1-12 〒811-34              |
|                       | 竹ノ上ケイ子 | 佐賀医科大学医学部看護学科 0952-31-6511(2505)<br>佐賀市鍋島 5-1-1 〒849          |
|                       | 若松かをい  | 鹿児島純心女子大学看護学部 0996-23-5311<br>鹿児島県川内市天辰町 2365 〒895            |

選出地区別50音順 現職が非常勤は自宅の住所・〒・電話番号 (1996. 3)